

# 学校健診視力障害について

病気に関連する予防医学と豆知識

小学生や中学生のお子さんは、そろそろ学校で視力検査が始まっていることと思います。何故視力検査を学校で行うのか？それは小さなお子さんは見えにくい状態であっても自分が見えている世界が正常だと思っているからです。例えば 0.1 しか見えていなくてもそれが日常であればそれ以上に疑問は持たず過ごすこととなります。ですから周囲が気づいてあげることが必要になります。そして、ほとんどは学校の健康診断の視力検査で発見されることになるのです。

視力には裸眼視力（眼鏡もなにも装用していない状態で測定したもの）と矯正視力（レンズを装用して出た視力）があります。裸眼視力が悪くても矯正視力がよければ眼鏡を装用することで視力が出るようになります。例えば近視、遠視、乱視などがあります。これらを屈折異常といいます。しかし矯正視力が 1.0 に満たない場合は眼に何かしらの異常があって視力が出ない状態になっています。例えば中等度異常の遠視、乱視、左右で極端に屈折の差がある場合、斜視、また角膜（くろめのところ）やそのほかの眼球の異常が考えられます。視力は生後に発育して 8 歳頃まで成長していきます。この途中で矯正視力が発達できないと弱視という状態になり、弱視になると将来に治療しても矯正視力が出ない状態になります。例えば何にも問題ない新生児に片側だけ眼帯をします。眼帯をし続けた方の目は発達せず小学校高学年になって眼帯をはずしても見えない状態は改善されず一生見えない状態で過ごすこととなるのです。これが例えば 2 歳ぐらいではずしたとします。はずした直後はそちらの目は見えませんが、見る訓練をすることで発達して、眼帯をしなかった目と同じように見えるようになって行きます。これは極端な例ですが小学校低学年までは物を見ることが眼の成長をうながすのです。学校視力で視力低下を指摘された場合はまず矯正視力が出ているのか矯正視力の出ない弱視かの判断がとても大事になります。子供の視力成長を守るためにも、学校で指摘された場合は眼科専門医による検査と診察が必要となるのです。



医療法人 照燈会

**あかね台 眼科脳神経外科クリニック**

Akanedai Clinic of Ophthalmology and Neurosurgery